

木魚の顔

長谷川時雨

青空文庫

ねずみこぞう
 鼠小僧の住んでいた、三光新道のクダリに、三光稲荷いなりのあったことを書き
 おとした。三光稲荷は失走人の足止の願がけと、鼠をとる猫の行衛ゆくえ不明うつたえの訴うを
 きく不思議な商業あきないのお稲荷さんで、猫の絵馬が沢山かかっていた。靈験れいげんい
 やちこであったと見え、たま、五郎、白、ゆき、なぞの年月や、失走時や、猫
 姿を白紙に書いて張りつけてあった。その近くに鼠小僧の隠れ家があったわけ
 になる。

油町あたりの呉服商の細君であった祖母が、鼠小僧の人柄なぞをどうして知
 っていたのかと思つたら、そのころ祖母夫婦は、樂屋新道がくやしんみち——葺屋町ふきや、堺町、
 などの芝居に近い——の附近すまに住つていた。場処がらで気らくに暮していたと
 見え、近所おかの岡おかつ引びきの細君と仲をよくしていたという。自然そんなことから鼠
 小僧の引廻しも見たのであろう。

七ツのアンポンタンに、九ツのアンポンタンに、十一、十二のアンポンタンにおぼろげ
 ながら近くの町の人の生活ぶりや身近な人たちのそれがぼんやりとうつつてきて、言い様よう

のないさびしさと、期望しても期望しても満みたされない佻わびしさがあつた。譬たとえて見れば、お正月にぎやになつたら賑にぎやかだろう、——賑にぎやかだろうという漠然とした思いのなかに、子供の空想と希望と理想が充満している。それが元がんとん旦たんの夕方ちかくなると、ああ、もう日が暮れるのにと、どうしていいかわからない物足りなさが憂鬱ゆううつをもつてくる。それにも似た——事はまるで違うが、日々ひびにぶつかる余儀ないさびしさだつた。

ある日、あたしは母の父の顔を穴のあくほど凝じつと見た。この老翁おじいさんは寺院おてらで見る大おおも木魚くぎよのような顔をしていた。木魚は小さいのは可愛らしいものであるが、大きなのが茵ふとんを敷いて座つていると、かなりガクガクとした平たい四角である。老翁おじいさんの顔も大きな四角なお出額でこで顎あごも張つている。そのくせ鼻は丸く安座あぐらをかいていて小さい目は好人物というより、滑稽こつけいみ味のある剥身むきみに似た、これもけんそんな眼だ。白い髭ひげが鼻の下にガサガサと生はえて、十二月の野原すすきの薄すすきのような頭髮が、デコボコな禿はげた頭にヒヨロヒヨロしている。悪口すれば、侏儒くもすけともいえる、ずんぐりと低い醜い人だ。

その前にも逢あつたかも知れないが、アンポンタンが意識した初対面の印象だつた。彼の身まわり辺は石炭酸かおりの香がプンプンした。

「ヒョウソになる性たちだから、これは働きながらでは無理だ。」

そういつて女中を——台所働きの女中をおさんどんと呼ぶころだった。そのおさんが昨日足の裏を咎めたのを気にしないでいたらば、熱が出て腫れあがったのを診察して、養生にかえすようにと言った。

老爺さんが洋科のお医者が出るのも初耳だった。あたしの家は頑固で、漢法医にばかりかかって練薬だの、振りだしだのを飲ませ、外傷には貝殻へ入れた膏薬をつけさせていたから——洋科の医者といえばハイカラなものと思っていたあたしは、石炭酸の匂いに厳粛になり、この汚ない老爺さんに呆然としていた。

そのまた老爺さんの言語がふるっている。

「長谷川氏は元氣かな。」

長谷川氏——あたしの父で、彼の婿である。常磐津の師匠の格子戸へ犬の糞をぬった不良若衆で、当時でのモダン代言人である。——あたしは、彼のデコボコ頭の凹みにたまった埃をながめた。

以下、その老爺さんの生活の断片で、アンポンタンの眼に映ったヒルムの屑である。すべてのことに転々とする人を見るとさびしい焦燥を他人ごとながら感じて、石が汗を

かくようなにじみだす涙がこみあげてくる時がある。生れながらの性さがもあろうが、ピツタリと、ものに廻りあわぬ悲しい人たちなのである。蚕でさえ心にあうところのあるまで、繭をかける場廻を選んで、与えられた木の枝の、果はしからはしまで歩き廻る——それは何やら満されない本能の求めなのではなからうか——老爺さん湯川氏も、自分の本質を空しくして、ただ長く生きた九十年の生涯である。

老爺さんは、湯川というのも自分の本ほん姓せいではない。仙台屋敷に生れたから仙台様の藩士だろう。お留守居るすい役だともきいたが、廻かいまい米まいの事に明るかった。父親もその役だったと見える訳があるから、江戸で生れた東北系の人である。

廻米とは仙台領の米を船で廻してくることで、その領地米を江戸邸やしきで受取る役人なのだ。江戸詰の藩士の禄高通り全部米で与えたものなのか。あるいは金に代えて渡したもののなか。よくきいておかなかった。当時の蔵前の札ふださし差や、浜方などの取引関係から、数算にたけ、世估せこに長じていなければならぬ、いわゆる世渡り上手の人物でなければならぬ。いのに、湯川氏はみいりのよい父祖の職をきらって御直参おじきさんの株をかった。直参といえはていさいはよいが、木こっ葉は旗本、貧乏御家人ごけにんの、その御家人の株を買って、湯川金左衛門邦純くにすみとなつたのである。湯川という姓は無論買った家の姓で、金左衛門も通り名である。

しかも、養父——名ばかりの、御家人株の売手が拾歳と下なので、嘘うその年齢が出来上ったために、娘たちを妹にして幕府の 人別帳にんべつちように記入して貰い、とにかく御直参にはなった。が、すぐに幕府は瓦解がかいした。株を売った真の徳川御家人の一人は、先見の明めいをほこつて、小金貸こがねかしでもはじめたであろうが、みじめなのは、新湯川金左衛門邦純ニユーであった。尤も老爺もつとさんの妻の父親が、上野輪王寺りんとうじの宮みやに何か教えていた××安芸守あきのかみという旗本で、法親王が白河へお落ちになつてから建白書のようなものを書いて死んだ人であり、身寄りにも上野の彰義隊しょうぎたいで死んだ若ものもあつたから、算盤そろばんをはじく武士より直参武士になれと進められたのかも知れない。とはいえ新御直参一家は、五月十六日朝の官軍上野攻めで狼狽あわした。いよいよ敗軍ときくと逃出す騒さわぎで、什器じゆうきを池のなかに投込んだり——上野山下の商家では店の穴蔵へ入れたという——井戸へ入れておいたりして逃出した。老爺おとしさんの二女——総領娘はある大名邸やしきに御殿奉公をしていた——私の母は九歳だったが、男おとし 鬻こまげにしていたので小刀を差して連れられて逃げた。吉原の土手下で夜を明した時、どこのものが名物の土手の金きんつばをくれたが、その大ききとうまさを何時までも忘れなかったと言つた。そうしてこの新御直参一家はみずから没落し、徳川十六代 亀かめ之助のすけ様のお供、静岡蟄居ちつきよというはめにおちた。

品川から出た二艘にせうの幕府の汽船に押し積まれて静岡へまでもつれてゆかれる幾百戸かの家族、それは徳川にしても厄介ものだったに違いない、ついてゆかねばならぬというものの中には、こうした一家もあつたのだ。静岡へいったからとて何の当あてがあるのではなし、百姓泣かせがいちどきに流れこんだのだった。命と体だけを積んでもらつた故、勿論もちろんたいたものは持つてゆきはしない、家財はみんな捨てていったのだ——こんな時だとして、上のものの方はどうにかなつたであろうが、耕す土地とてそうあらうわけはなし、無禄無扶持むぢちになつた小殿様たちは、三百年の太平逸楽いづらくに奢おごつて、細身の刀も重いつた連中である。忽たちまちにして畑の芋盗人いもどろぼうとなり、奥方は賃仕事をして糊口ここうをしのいだ。

湯川氏の家では不用になつた袴はかまが商品に化けた。仙台平せんだいひらや博多はかたの財袋がつくられて売られた。お百姓がお客様なのであるが、売手に怖おそれて近寄らないのと、売る方でも気まりが悪いので、七たなばた夕たなばたの星まつりのように篠ささの枝へ幾個いくつもくくりつけて、百姓の通る道ばたに出しておいて銭ぜにに代えた。

幕府の瓦解は御直参と威張つた旗本、御家人の墜落ばかりでなく、大名も廢藩置県はいはんちけんとなつたから、湯川の姉娘も帰つてきた。ともかく、わびしきにつづく中に振り袖姿の年頃の娘を見る事は親たちは嬉しかった。この娘だけが失わずにいた衣装道具を、失わずに

おかせたいと思つた。とはいえ用捨なく生活の代は詰るばかりである。それを助けるためにお供の連中は遠州御前崎に塩田をつくれとなつた。

あたしの母は十二になつて、屈強な体力をもつていた。姉と妹二人はどうにもならなかつた。彼女は小船を漕いだ。彼女が今でも一番恋しい景色は遠州御前崎の今切れの渡しのところと味方が原だという。彼女は早抹、父親をはげまして自ら小船を漕いで塩浜へとゆく。十二の彼女の海水の撒きぶりには及ぶものがなかつたほど、終日を働きくらしした。

と姉娘に縁談が起つた。親たちは江戸がえりの娘の美しさゆえに——と思つた善人である、先方が旗本で、旗本が口をきいてくれたのだからといった具合で悦んだ。仲人が来た。夏のことで白扇をサラリと開くと懐から贈物の目録書と、水引をかけた封金を出して乗せたが、

「芽出度御受納くださるように。」

と丁重に述べておいて、下げた頭をあげると、動作のゆっくりした湯川氏が手をださぬうちに扇の要をくるりと向けかえて、

「御同様に、此方様からも御贈りでござろうから、諸事節約、緊縮して——」

とかなんとか浜口内閣のようなことを言つて、もつてきた結納金ゆいのうぎんをまた懐中に入れてしまった。それでも好人物な、他人ひとを疑うことをしない夫婦は、悦びだけを受入れ、悦びの意だけを空っぽで渡した。

——あたしの母は、今でも言う、姉さんが味方が原の秋草の中を、馬に乗つて美しい振袖を着ていった。これはお前にやるよといったものまでみんなもつていつてしまった。お嫁にゆくとなつたらケチになつて、何もかも持つていった。姉さんが御奉公に出たころは、家も富貴だったので、市ヶ谷のあまざけや（有名な呉服店）で、好みこので染めさせたものばかりだったが、私は子供心にもこの嫁入りの仲人が変だと思つた。昔のお金は小判で重いの、包んできた水引のかかつた奉書は薄つぺらで軽かつた。よつぽどたつて嫁入りさきにたずねていつたら、連合つれあいも、姑も、姉も、みんながあたしの姉さんの着物を着ていた。無力の巧たくんだ一種の略奪であつた。さすがの御直参湯川氏も考えさせられた。これではならないと働たくきものの二女を伴つれて江戸へ出た。江戸には住みすてた邸やしきもある。池の中には何かしらが残つていよう。深川佐賀町の廻船問屋には自分の妹が片附いている。商人には障さわりがなかつたということが彼を心強くさせもした。

紅葉もみぢを踏んで箱根の山も越した。以前の住家すみかへゆくと玄関の両側にたてた提灯しょうとうの定

紋もんは古びきつて以前のままだが、上方の藩の侍が住んでいて、取次の男が眼をむいて睨にらんだ。家財なぞしらんと——だが深川の商取引の活かつぱつ澆はつらつさは昔どころではなく、澆はつらつ澆はつらつとして大きな機運が動いていた。義弟の佐賀町の廻船問屋石川佐兵衛の店では、仙台藩時代の彼の緻密ちみつな数算ちまつぶりを知っていたので手を開いてむかえた。働きものの小娘は気むずかしい伯母おばの小間こまつ使いかになった。

だが、人間をあやつる傀儡師かいらいしはなんといいたずらをしようとするのか、この湯川氏が、働きものの二女を芸妓に売ろうと思ったり、また、この小娘が未来に教育界の先駆せんくし者やとなろうとしたのをさせなかつたり——彼女に手習いを教えた女学者が、この子を養つて自分の意志をつらぬかせたいと懇望したが許さなかつたのだつた。

石川佐兵衛は暗愚あんぐでも、時流が廻米、廻船問屋というものを恵んだ。そこに湯川氏の数算ちまつと長年の蘊蓄うんちくが役に立つて石川の家運はあがった。その頃の湯川氏の知己の名は自毛じけ村むらであるとか、三野村みのむらだとか鉦しょう々そうたる大実業家となつた人たちである。石川屋は三井物産前身の如きものだともきいたが、やがて石川屋は没落し、それよりずっと前に湯川氏はまた動きだした。あたしが知つた老爺おじいさん湯川氏は、それからずっと後の彼だつたのだ。

あたしの家で——彼のいう長谷川氏の宅で、彼のために小晩餐会が催されたことがある。彼の老妻や、他の娘や、娘たちの婿なども寄りあつまつたが、客座敷ではなく常の食事をする室で、各自膳で車座になってお酒も出た。

「いや、どうも、かくお手厚い御饗応にあつては恐縮のいたりで——」

木魚の顔が赤くなって、しどく豊に、隠居じみた笑いを浮べて、目をシヨボシヨボさせながら繰返していつていた。

「老爺さん、こんどこそはひとつモノにして下さい、なにしろ君にいためられた皆が浮かばないよ。こつちの家だつて、なんだかんだつて大変だあね。」

そういつたのは姉娘の婿——遠州では仲人にたつた旗本だった。

「それは大丈夫だ、こんどはウンと皆をよろこばせる。」

もうその頃は七十位だったのであろうが、遠くへ単独でゆくような様子だった。

「味噌も米も困らないように送つてあるから。」

と彼の老妻はつぶやくようにいつた。そしてみんなが何処へか送つていつた。

「牛肉の佃煮でも送つてやつたら——」

父がその後、母にむかつていつていた。

「だが、今度もあてにはならないぞ。」

そういうふうには彼は二年も三年も漂然ひょうぜんといなくなつて、現れるとムツツリとした風貌うぼうを示し、やがてまた人々に送られて、至極満足そうなニコニコ顔で出かけた。

そうした祖父の存在は子供たちからは忘れがちで、外祖母は末の娘と二人で住んでいるものだとばかり思った。上野下の青石横町に住んでいたころも、根岸のお行ぎようの松のすぐそばに、音無川の前にいたころもそうだった。老嬢おうるどみすになつた娘のミシン台とたんすが一棹ひとさおあるきりのわびしい暮しかただった。どうしてこんなにガランとしているのかと思つたが、それはみんな湯川氏が硫黄いおう発見に入れこんでしまうのだった。たまたまとまりにいつた時、祖父が帰つてきたりすると、妙な風躰ふうたいをした男がぞろぞろくるので嫌いやでならなかつたが、家に帰つて父に訊きくと、父はまたかというようので、

「老爺おじいさんまた賺だまされなければいいが。」

と呟つぶやいた。彼の周囲のものも、僅きん少しょうな家禄放還金かかくをみんな老爺さんの硫黄熱いおうねつのために失われてしまつているのだということ、あたしたちも段々さとしに悟つた。

なにが湯川老人をそんなに硫黄狂人にさせたか知るものがない。ともかく四十年からの

彼の事業である。重に北の方を歩いてきたが小笠原島あたりにもなんのためか長くいた。山のめききは凄^{すこ}いほど当^あつたが、訓練にも工夫をつんだが、悲しいかな老爺さんの発明は、丁度お直参の株をかつたのと同じようにいつも世界の年代からおくれている。強情で頑固なところが最進智識をすこしも求めようとしないで、自己流の工夫でコツコツやるのだった。そのうちに年月は十年も十五年も飛び去る。老爺さんの頭はだんだん凸凹が多く深くなつて、黴^{かび}がはえたようにそのくぼみに埃^{ほこり}がたまる――

ある時、ヒヨックリと現われた湯川氏は、赤い毛布^{ケット}をマントのように着て手拭^{てぬぐい}で咽喉^{のど}のところ結びつけていた。山籠^{やまごも}りから急に自分の家にもゆかず長谷川^{うじ}氏をたずねて来たのである。いそがしい父の小閑^{ひま}を見ては膝^{ひざ}をすりあわせるようにして座りこんでいた。いつも鉢山^{やま}のことになると訥^{とつべん}弁^{のうべん}が能^{のう}弁^{べん}になる――というより、対手^{あいて}がどんなに困ろうが話をひっこませないのだ。父は他人^{ひと}の紛^{ふん}糾^{きゆう}事件で家族に飯をたべさせているのだから、煩^{わづら}わしいことをきくので頭が一ぱいであつたらうに、例の大木魚の顔がムズと前に出たらダニのように離れない。私は子供ながらハラハラした。父の前からはなるだけ離れているように家族は心懸けている。父も子供にも小言もいわない位に離れているのに――で、私は好奇だからでもなんでもなく、なるだけ大木魚の老爺さんの顔を自分の前にもつてく

るようにした。一体アンポンタンは家のものから遠ざかってポカンとしてばかりいたのに、木魚の老爺さんとだけ話をするのでよっぽど妙だったかもしれない。

「おじいさんに恐おそれ山さんへでも連れてつてもらおうがいい。熊とおじいさんと三人で住むんだ。」

そんな事を大人はいつて笑った。

アンポンタンと湯川氏はポツンポツンと問答をはじめめる。

「おじいさんの頭はどうしてこうデコボコになったの？」

「小笠原島で亀かめの子の卵をあんなりたべたので、勢せいがついてデコボコになってしまった。」

「小笠原島の亀の子つて、大きいの？」

アンポンタンは、背中に題目を彫られた大きな亀がつかまって、も一度海にはなされる時、お酒をのませたのを覚えていて、その二尺五寸もある甲を思いうかべていた。

「そうだよ、大きな亀の子が揃って出て来て、浜の砂を掘って、ズラリと並べて卵を生んでゆくのだ。人間はそれを盗むのだからいけないな。」

「おじいさんも盗んだの？」

「そうだよ、盗んで幾個いくつも食べた。」

「なんのために食べたの？」

「長生ながいきをするためにさ。」

「何故なぜ？」

「硫黄を——質たちのいい硫黄を製造して——硫黄の出る山はウンと見てあるのだけれど——

お前のお父さんが承知さえしてくれれば……」

おじいさんは刀なた豆煙管たまめキセルをジユツと吸った。

「恐山おそれざんに熊が出るの？」

「出てくるがなんともしない。」

「どんな風ふうにしているの？」

「紙帳しちやうとていつてな、紙で張った蚊帳かやみたいなものを釣つて寝るのだ。寒さよけにもな

るしな、火を焚たいておくと、熊はくるがおとなしいよ。」

私は熊の子と友達になつてもいいなという気持ちになる。紙帳しちやうのことは『浅間あさまが嶽だけ』と

いう、くさ双紙そうしでおなじみになつている、星影土右衛門さかゆきという月代つきよのたつた凄すげい男が、

六部の姿で、仕込み杖づえをぬきかけている姿をおもいだし、大きな木魚面の、デコボコ頭の、

チンチクリンの老人を凝じつと見詰みつめた。

「おじいさんは硫黄山へ何もかもつきこんでしまったのだった？」

「出来上ればみんなを悦よろこばせるのだが——」

おじいさんは、版下を書くように、細かく綺麗きれいな字を帳面一ぱいに書きつけたのを出した。分らない私にも説明しようとした。四寸ばかりな算盤そろばんをだして幾度いくたびもはじいた。

老爺さんの根気に負けて、父が福島県下へ連れてゆかれたのは、磐梯山ばんたいさんだか吾妻山あずまさんだかが破裂したすぐあとだった。父はへトへトになつて帰つて来て座らないうちにいった。「出来るだけのことならしてやろうよ、あの年でたいした気根きこんだ。」

あの老人が山へはいると仙人のように身軽になつて、岩の上なんぞはピョンピョンと飛んでしまい、険けわしい個所ではスーツと消てしまったように見えなくなる。気がつくはると遙か向うでコツコツ何かやっている。さながら、人跡未踏じんせきみとうの山奥が、生れながらの住家のよううで、七十を越した人などとはとても思われぬ。山の案内人などの話でも老爺さんが一足踏ふみ入れて、あるといった山に硫黄のなかつたためしがなく、歩いていると、ふと向うの山の格好を見て言いあてる。土地の者たちも神様のように言っているというのだった。「だが、宿は温泉だといつておいて赤湯だの、ぬる湯だのと、変な板かこいの小屋へ連れ

ていつて、魚の御馳走だといつて、どじようを生なまのまま味噌汁おつけの椀わんへ入れられたには——」

とすつかり閉口へいこうしていた。でも、どうやらこうやら父から出資しゅしさせる事になつて老爺おやさんは欣きん々と勇ゆうんだ。情なさけにもろくつて、金かねに無頓着むとんじやくな父は、細かい計算けいさんをよく嘯かまなかつた。損徳そんとくよりもただ幾分いくぶんの出資しゅしを捨する氣きでしたのでつたろう。

老爺おやさんが得意とくいになると、今まで冷笑れいしょうしていた親類みよりのものが手伝てづい志願しがんを申出まうだした。自分おれたちも損そんをしただけ取りかえそうという、御直参ごちさん旗本はたもとの当主とうしゅや子こや孫そんである。

梅うめ干ぼし幾樽いくすん、沢たく庵あん幾樽いくすん、寝具ねぐ類るい幾いく行李こり——種たぐひ々な荷物にものが送おくられた。御直参ごちさん氏うぢたちは三さん河島かしまの菜漬なづけがなければ困まはるという連中れんちゆうであるから、行いくとすぐすぐに一人ひとりずつ一人ひとりずつ落伍らくぶして歸かへつて來きてしまつた。そして言ういうことはおなじだつた。

「何なにしろ、一ひと鍬くわいれるとポンと強つよく硫黄りゅうわうが匂におうのだから、胸むねが苦くるしくつて飯いも食くえない。」

老爺おやさんの硫黄りゅうわうはよく出來た。しかし近間きんまの山林さんりんは官林くわんりんなので、民有林みんゆうりんから伐ば木ぼくして薪まきを運たぶのに、嶮岨けんそな峰みねを牛うしの背せでやつた。製煉せいれんされた硫黄りゅうわうも汽車きしやの便べんがある土地ちまで牛うしや馬うまが運たんだ。東京とうきやうや横浜よこはまへ送おくられると、運賃うんちんと相殺そうさいでフイになつてしまふ。

その後も幾度か繰返された失敗のあとで、晩年を湯川氏夫妻は長谷川氏に引きとられた。八十を越しても硫黄の熱は燃もえていた。小さい机にしがみついたまま、贅ぜいたく沢は身の毒になると、螢ほたるび火の火鉢に手をかざし、毛布ケットを着て座っていた。例により珠算たまざんと、細かい字と、硫黄の標本をつくつたり、種々にして手に入れる硫黄の一つまみを燃したり製煉したりして、庭隅に小さな釜をこしらえたりして首をひねっていた。その頃は父も閑散かんさんな身となつて佃つくだじま島にすんで土いじりをしていたので、一所に植木いじりはしていたが——たまたま粋いきな客などが来て、海にむかつた室で昼間の一いっすい酔よに八十翁もよばれてほろよいになると、とてもよい声で、哥うたざわ沢の「白酒しろざけ」を、素人しろうとにはめずらしい唄うたいぶりをした。もう大人になつていた私が吃驚びつくりすると、老人の老妻は得意で、

「おじいさんは、お金を湯水のようにつかつた、いきな人ですよ。」

と彼女も小声で嬉しそうに口の中で何か唄つた。

「おじいさんには面白いおはなしもございませんのさ。私がね、誰かの初はつのお節句のおり、神田へ買ものにゆきますとね、前の方に、粋いきな女たちにとりまかれて賑かにゆく人がありますのでね、おやおや、何処どこの大だい尽じんかと見ますとね。小ちいつぽけな旦那だんなで、黒ちりめんの羽織で、お刀がチヨコンと突つぽつて、その風采ふうさいのみつともなさつてつたら、あたくしが

吹きだしますとね、その人が後を振りむきましたのですよ、どうもあの老翁おじいさんに違いな
いのですが、あたくしもよく似た人があるものだと思つて感心いたしました……」

クスクスおばあさんは笑つた。その結果がふるつている。

「よくまあ、あんな綺麗きれいな粋ほな女が惚ほれたものでございますねえ。」

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木魚の顔

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>